様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １０ 日現在

機関番号：１４５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０２３１０

研究課題名（和文）「見るもの」としてのファッション―表象装置としてのミュージアムとの関係から

研究課題名（英文）Exhibiting Fashion: The Role of Museum in the 20th Century

研究代表者
平芳　裕子（Hirayoshi, Hiroko）

神戸大学・人間発達環境学研究科・准教授

研究者番号：５０３６２７５２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、20世紀におけるファッションとミュージアムの関係の接近において、ファッションがいかに「見るもの」として構築され、表象装置としてのミュージアムのもとに制度化されたのか、その歴史的プロセスを明らかにしたものである。
　具体的にはニューヨークの３つのミュージアム、アメリカ自然史博物館、ブルックリン美術館、メトロポリタン美術館を対象として各館における衣装コレクション、デザイナー活動支援、ファッション展企画の成立と発展を辿ることによって、文化的枠組みとしてファッションがいかに「着るもの」から「見るもの」へと質的変容を遂げたのか、その歴史的プロセスを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究は、20世紀前半のアメリカにおける服飾産業推進とデザイン振興運動を背景としながら、伝統衣装と現代服飾がニューヨークのミュージアムの収集・展示の対象へと取り込まれていく歴史を明らかにしたものである。従来の芸術学やミュージアム研究では見過ごされてきた「ファッション展」に注目し、その歴史を明らかした点において本研究の学術的貢献が認められる。また21世紀の現代、世界各地の美術館・博物館において「ファッション」展は人気を博すが、その歴史的文化的背景を明らかにしたことに、本研究の社会的意義が認められると言える。

研究成果の概要（英文）：　This research examines the history of fashion exhibitions in the early twentieth century in New York and their influence on museums in the late twentieth century. It describes early efforts to exhibit ethnic textiles and modern clothing in the American Museum of Natural History, Brooklyn Museum and the Museum of Costume Art (now known as the Costume Institute of the Metropolitan Museum). Focusing on the relationship between clothing industries and museum collections in New York, we consider the method and meaning of creating fashion exhibitions in museums.

研究分野：表象文化論

キーワード：ファッション　美術館　ファッション展　作品評価　展示価値　アメリカ

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

研究代表者はこれまで 19 世紀アメリカの女性誌を対象として、近代ファッションにおける流行の生成と受容の問題を考察してきた。平成 18-21 年若手研究 B では、19 世紀前半におけるパリ・ファッションの受容と改変による流行文化の誕生を、平成 22-24 年若手研究 B では、19 世紀半ばにおける「お針子」の表象を通じて衣服生産の機械化と家庭裁縫の促進による流行文化の定着を、先の平成 25-27 基盤研究 C では、19 世紀後半におけるパターン（型紙）の開発と頒布によるファッション文化の発展を明らかにした。これら雑誌を対象とした研究を通じて、19 世紀アメリカにおけるファッション文化の成立過程を明らかにしたが、同時に新たな課題も残された。それはメディアの多様化する 20 世紀前半において、ただ二次元の雑誌メディアだけではなく、三次元的メディアとも言うべき展示空間を有するミュージアムがアメリカン・ファッションの確立にいかなる影響を及ぼしたのか、という問題である。そこでこれまでの研究成果を踏まえた発展的な課題として、20 世紀前半のアメリカのミュージアムにおけるファッション展の成立過程における諸問題解明の必要性を確信し、本研究の着想へ至った。

２．研究の目的

本研究は、20 世紀におけるファッションとミュージアムの関係の接近において、ファッションがいかに「見るもの」として構築され、表象装置としてのミュージアムのもとに制度化されたのか、その歴史的プロセスを明らかにしたものである。

とりわけ、ニューヨークのミュージアム（アメリカ自然史博物館、ブルックリン美術館、メトロポリタン美術館）による衣装収集・デザイナー育成・ファッション展立案の経緯を詳らかにすることによって、アメリカン・ファッションの確立にミュージアムが果たした役割を明らかにするとともに、文化的枠組みとしてのファッションにおける「着るもの」から「見るもの」への質的変容について考察した。

３．研究の方法

ファッション展の確立に重要な役割を果たしたニューヨークのミュージアム、すなわち①アメリカ自然史博物館、②ブルックリン美術館、③衣装美術館（のちのメトロポリタン美術館衣装部門）を具体的な調査対象とした。

上記の三つのミュージアムそれぞれについて、 <a>文献資料調査、<b>作品実見調査、<c>インタビュー調査、<d>アーカイヴ調査を行った。その際、次の三段階の時代区分(1)(2)(3)をもとに調査を実施した。

(1)20 世紀初頭において、ファッションはいかにミュージアムと接近するのか。具体的には 1910 年代の①アメリカ自然史博物館を中心とするミュージアムとファッションの近接について、上記<a>から<d>の調査を実施した。

(2)20 世紀前半において、ミュージアムはいかにファッション・デザインを支援するのか。具体的には 1920 年代から 1930 年代にかけての②ブルックリン美術館を中心として、美術館によるファッションへの介入がいかに行われたのか、その経緯について上記<a>から<d>の調査を実施した。

(3)20 世紀半ばにおいて、ファッションはいかに「見るもの」として制度化されたのか。具体的には 1940 年代の衣装美術館（のちのメトロポリタン美術館衣装部門）を中心に、アートとしてのファッションへのまなざしが誕生した過程について、上記<a>から<d>の調査を実施した。

以上を通じて、20 世紀におけるファッションとミュージアムの接近において、ファッションがいかに「見るもの」として構築され、表象装置としてのミュージアムとのもとに制度化されたのか、その歴史的プロセスの解明を試みた。

４．研究成果

三年間の研究期間中、ニューヨーク州立ファッション工科大学の客員研究員として、アメリカでの長期研究調査が可能となった。そこで同大学付属図書館・美術館を拠点としながら、ニューヨークの主要ミュージアム（アメリカ自然史博物館・ブルックリン美術館・メトロポリタン美術館）での調査を通じて、次のような歴史的変遷を明らかにした。

(1)1910 年代には、とりわけアメリカ自然史博物館のクラーク・ウィスラーらを中心として、既製服産業振興のための活動、民族衣装を活用した展示、ファッション業界紙の協力によるコンテスト開催が行われた。20 世紀初頭において、既製服業界と雑誌メディアとミュージアムが連携し、アメリカン・スタイルの確立に向けての協働作業が実現した。

(2) 1920 年代から 1930 年代にかけては、とりわけブルックリン美術館のスチュワート・クーリンらを中心として、所蔵品活用によるデザイン活動の支援、デザイナー育成のための教育プログラムが実施された。20 世紀前半から半ばにかけての美術館によるファッション産業への積極的な介入の様相を明らかにした。

(3)1940 年において、（それまでのブルックリン美術館における）デザイン活動支援やデザイナー育成運動、またファッションの収集・作品展示に関する功績が、衣装美術館（のちのメトロポリタン美術館衣装部門）へといかに引き継がれたのかを明らかにした。とりわけメトロポリタン美術館所蔵の芸術作品と展示されることによって、ファッションは作品としての評価、芸術としての価値を高めることになる。その歴史的経緯を明らかにした。

以上を踏まえ、20 世紀におけるファッションとミュージアムをめぐる次の二つの状況を考察した。第一には、商業空間におけるファッションの登場である。特に商店や百貨店の発展にともない、ショーウィンドウやマネキンを介してファッションが目に見えるものとして展示されるようになる。第二には、ミュージアムにおけるファッションの可視化である。アメリカ自然史博物館・ブルックリン美術館・衣装美術館（のちのメトロポリタン美術館衣装部門）を中心として、デザイン推進運動やデザイナー支援を背景としながら、民族衣装や（同時代の）現代衣服の展示が行われるようになる。20 世紀初期の実験的試みから、歴史衣装展や現代衣服展が開催されるようになり、さらには芸術作品とともにファッションが併置されることによって、ファッションは芸術と同等の価値をもつものと見なされるようになる。それと同時に、このようなファッションの展示は、19 世紀的な理想的女性像の再生であると言える。つまり、19 世紀においては女性誌やファッション雑誌において、最先端の流行と理想的女性像が再現された。それが 20 世紀に入り、百貨店やミュージアムなどの公共空間に登場する。二次元的な雑誌紙面から三次元の展示空間への移行にもかかわらず、理想的女性像はファッションを通じて再生産される。近代アメリカのメディアにおける「ファッションと女性」の分かち難い連関が明らかとなった。

以上の研究成果を、雑誌論文や学会発表のみならず、単著『まなざしの装置―ファッションと近代アメリカ』（青土社）として出版した。同書はファッションを主たる対象としながらも、美術史・女性史・アメリカ研究などを横断しながら、文化研究としての「ファッション」の意

義を広く社会に伝えようと試みたものである。

　また本研究を推進するにあたって構築したニューヨークの研究機関および研究者・学芸員とのネットワークを通じて、今後も継続的な研究展開を期待することができる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　4　件）

(1)平芳裕子「パターンによる流行需要―初期『ハーパース・バザー』の重要性」『デザイン理論』、査読有、第 68 巻、2016 年、pp.21-34.

(2)平芳裕子「モデルに倣う―ファッションにおけるパターンの出現」『表象』査読有、第 11 号、2017 年、pp.254-269.

(3)平芳裕子 “The Representation of Sewing Women in Godey’s Lady’s Book,” *Aesthetics,* 査読有、No.20., 2017, pp.50-61.

(4)平芳裕子「近代アメリカ女性の服作り―針仕事・パターン・通信教育―」「Fashion Talks…」査読無、第 6 号、2017 年、pp.2-11.

〔学位論文〕（計　1　件）

(1)平芳裕子「近代アメリカのメディアに見る表象としてのファッションと女性―雑誌・パターン・ディスプレイ」博士学位論文、2018 年、pp.1-235.

〔学会発表〕（計　2　件）

(1)平芳裕子「ファッション雑誌の技法―イメージ・ことば・設計図―」日本記号学会、2017 年。

(2)平芳裕子「ファッション研究＋批評はなぜ困難なのか？」表象文化論学会大会、2018 年。

〔図書〕（計　1　件）

(1)平芳裕子　『まなざしの装置―ファッションと近代アメリカ』青土社、2018 年、256 頁。

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。